The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ブレイクの中期予言書にみる Institution
Author(s)	日比野, 真己
Citation	Osaka Literary Review. 2000, 39, p. 49-62
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25187
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ブレイクの中期予言書にみる Institution

日比野　真　己

ウィリアム・ブレイクの中期予言書とは、『詩的素描』『無垢の歌』等の初期の作品から、ブレイク独自の壮大な神話体系が展開する後期の『四つのゾア』『ミルトン』『ジェルサレム』までの中間に創作された一連の詩及び版画作品である。予言書には、18 世紀末から 19 世紀初めの激動の社会が暗示されていると共に、後の神話体系の萌芽となる要素が随所にちりばめられているため、ブレイクの複雑な思想体系を理解するためにそれらは重要な作品群である。

詩『フランス革命』は崩壊寸前のアンシャン・レジームの状態からバスティーユ陥落に至るまでの過程を描いているが、ブレイクは歴史的出来事を詩に取り込みつつも、独断的に事実を歪曲している。その歴史描写は必ずしもジャーナリスティックなものではなく、政治的な事件を人間の精神の問題と捉えることにブレイクの神話世界の原型が見られる。「予言」の副題をもつ『アメリカ』『ヨーロッパ』ではさらにその色合いが濃い。それは、アメリカ、ヨーロッパの二大陸での革命に触発されて書かれたにもかかわらず、同時代的な歴史上の事件が、ブレイクの神話的人物にとって変わられ、普遍的な、人間の精神的な自由へのプロセスとして予言的に描かれているからである。この二つの作品に加えて、『ロスの歌』はひとつのグループを形成するものとして位置づけされている。というのも『ロスの歌』は「アフリカ」「アジア」と題された二つの部分から成り、『アメリカ』『ヨーロッパ』と『ロスの歌』で、アフリカ、アメリカ、ヨーロッパ、アジアの四大陸を形成するからである。本稿ではこれら三つのブレイクの精神的世界史ともいうべき作品を中心

に考察したい。

ブレイクの詩世界の特徴は先に述べたように、歴史的な出来事である革命を人間の内部に投影することにある。即ち社会での闘争が、理性、反逆精神、想像力、感情などの心理的エネルギー間の相克として描かれ、かつその争いがブレイク独自の神話的な世界観に投影されているのである。このように、現代心理学に匹敵するような精神的レベルと歴史的レベル、キリスト教を含む独自の神話のレベルの異なった三つのレベルの混在はブレイクの詩の特徴でもあり、難点でもある。これらの混在には様々な理由をあげることができる。

まず、第一にブレイクが神話に頼らざるを得なかった必然性がある。ブレイクの時代は、いくつかの革命により社会が目に見えて変化した激動の時代であった。その時代に生きていた詩人の作品に歴史的事件が投影されないはずはない。しかし一介の版画職人にすぎないブレイクが社会の現状を直接批判するような発言をすれば、反逆罪に問われかねない危険性があった。事実ブレイクは自宅の庭に忍び込んだ兵隊ともみあいになり、反逆罪で訴えられた。幸いにも、ブレイクは無実となったが、権力に対する反抗心を常に抱いていたブレイクにとって、過激な意見を神話の皮膜で覆う必要は多かれ少なかれあったにちがいない。[1)]

しかし、ブレイクほどの激しい性格の持ち主がただこれだけの理由で神話の形式を選んだとも考えにくい。当時の社会は詩の中で確実にブレイクによって批判されている。だが、ブレイクが問題にしているのは歴史的事件そのものではなく、その背後にある人間の精神の普遍的な問題なのである。したがって、詩の中に所々存在する当時の社会への示唆は、史実に忠実である必要もなく、それらを引き起こした精神性のみが重要なのだ。また、ある時代の現象を普遍化するためには、その現象を人間の精神的なものに投影する必要がある。そこで第二の理由としてあげられるのは、ブレイクの詩では歴史的な事件を普遍的な問題としてとらえるために、一人の人間精神に投影し、理性、

想像力、反抗心、感情などの心的エネルギー間の相剋にすりかえる必要性があったことである。ブレイクが歴史上の事項を心的なエネルギーの闘争に置き換えたのは、必然的な展開なのである。ブレイクは『無垢の歌・経験の歌』では一つの事象に対して、全く対立する二つの視点から物事を眺めた詩を書いた。そのような詩を書いていた詩人が、自分の内部に存在するいくつかの異なった声に耳をかたむけ、それぞれを心的な機関として、独自の心理学を発展させたのは自然の成り行きといえよう。

歴史的現象、人間の精神、神話といったレベルが混在する第三の理由としてあげられるのはブレイクの知覚に対する考え方に基づくものである。ブレイクにとって五感とは五つの「窓」のようであり、理想的な状態では「五感の窓」は常に開かれ、外界での現象はすなわち心理内部のものであり、心理内部のものは当然外界にあるものとして認められるといった、内と外の感覚の通行が自由に行われる。そして、神話とは我々人間が生きている世界の源をたぐり寄せることにより、世界の形成を含め、世界の現象を再度把握しようとする試みである。知覚といった最も原始的な現実認識にこだわるブレイクが、人間の歴史の原始的再認識である、神話のスタイルを用いたのは自然であるように思われる。

したがって「窓」や「門」といった比喩はブレイクの作品のなかで重要な意味を帯びることになる。このことはブレイクの詩全体において随所に示唆されるが、一番明確に現れているのは、『ヨーロッパ』の冒頭である。

> Five windows light the cavern'd Man; thro' one he breathes the air; Thro' one, hears music of the spheres; thro' one the eternal vine Flourishes, that he may receive the grapes; thro' one can look. And see small portions of the eternal world that ever groweth; Thro' one, himself pass out what time he please, but he will not; For stolen joys are sweet, & bread eaten in secret

pleasant. (*Europe a Prophecy*, pl. iii: 1-5)

この箇所では、人間は知覚の「窓」を開くことにより時間・空間の束縛から自由になりうることが示されている。言い換えれば、時代や場所の束縛を受けない自由な状態である「永遠の世界」の一部を垣間見ることができるのである。けれども人間は「盗んだ喜び」や「秘密裏に味わうパン」に表象される現世的な快楽に溺れていて、五感の窓を鎖しているので「永遠の世界」を見る能力を無駄にしている。しかし、詩人はそうではない。詩人は知覚の「窓」を通して、「永遠の世界」を見ているのである。ブレイクが同時代の現象を神話的、精神的に捉えたのはこのような知覚の窓を解放する能力を持っているからである。ブレイクが史実にこだわらずに、神話世界を展開したのはこのような能力によるものなのだ。要するに、時代や場所の束縛を受け、歴史の事実に固執するあまり、普遍的なもの、即ち「永遠の世界」を見ないことは、知覚の窓を鎖すのと同じである。

このような感覚の門を解放することは政治的自由への道でもある。詩『ヨーロッパ』ではアメリカでの革命を受けて、フランスの革命精神を象徴する神話的人物オークが目覚めるプロセスが描かれるが、この詩の最終ページの版画は想像力を司る神話的人物ロスが気絶した女性と子供を抱えながら牢獄からの出口と思しき階段を駆け上がろうとする図である。詩の冒頭で歌われた知覚の「窓」の解放はつまるところ政治的な抑圧から自由になる窓口でもある。しかし、ここで注目すべきことがある。それはブレイクが、洞窟の中の人間を五つの感覚の窓が照らすだけではなく、人間自体を洞窟のような建物として描いていることである。『ヨーロッパ』では人間の身体があたかも建物として明確に描かれている。そこではイギリスの圧制者アルビオンの天使が、街中を牢獄と化する状態が描かれる。そしてその悪しき守護者は古代ドルイド教のような誤った宗教に教えを求め、「蛇の宮殿」を建設し、民を間違った方へと導く。その「蛇の宮殿」が建設されたときに、世俗の洪水に飲

まれた「五感の門」は閉じられ、残ったのは「この制限された肉体の壁のみ」と書かれている。このことは感覚を束縛された人間の身体は蛇の宮殿の建設物であることを示す。また、その教えを流布するための説教壇である「夜の石」はかつては紫の花と赤い実がなっていた南にあったが、今は毛髪が生い茂り、「石の屋根」に覆われた人間の頭蓋骨の中にあると書かれている。つまり、人間の思想を束縛するのもまた、建築物と化した人間の脳髄である。また、『ユリゼンの書』の中で、人間の精神を呪縛する最たるものである理性や権力を体現する神話的人物ユリゼンは、自分自身が最も束縛されている姿を露呈し、その身体は建物として描かれる。そこでは「毛むくじゃらの屋根が思想の泉を閉じ込め」、「背骨と肋骨は曲がった洞窟」だと記述されている。また、『四つのゾア』では狂気に陥った理性であるユリゼンは自らを救済するため街に巨大な建造物を築く。結局、これらの描写では，抑圧者／被抑圧者の図式よりは、両者が同じように自らの精神を建築物によって閉ざしていることが示唆されている。

このようなことを見てくると、ブレイクは近代的な自我は建物によって規定されていると考えていたことがわかる。人々を束縛する教会や、自由を拘束する牢獄などの施設は institution の言葉で表すことができるが、まさにこの意味における institution が形成されたのが、ブレイクが生きた 18 世紀であった。

この言葉は現代人の我々にも親しみがあり、重要な意味を持つが、この英語の言葉には一つの訳語では表しきれない多様な意味がある。*Oxford English Dictionary* によると、元の意味は「何かを始める、創設すること」である。そしてそこから二番目の意味、「物事に形態や秩序を与えること」また「あらゆることが規定されるような秩序を設立すること」の意味になる。我々が良く知る「制度」の意味においては十六世紀頃から使用されていたようである。[2] ブレイクが奴隷制度 (the institution of slavery) に反対し、『アルビオンの娘達の幻想』などの作品を作ったことはよく知られている。

また、ラディカルな詩人であるブレイクは詩「ロンドン」において、「結婚の棺」という驚くべき表現をすることにより、教会によってのみ承認される制度としての結婚 (the institution of marriage) にも疑問を投げかけている。ブレイクがあらゆる制度化された人間関係を嫌悪していたのは明らかである。

しかし、ブレイクが批判していた institution はこれだけにとどまらない。ブレイクが生きた 18 世紀に、institution は新たな意味を帯びつつあった。それは「ある宗教的、慈善的、教育的等の公的な功利を促進することを目的に始められた施設、組織、協会」の意味である。それは例えば、教会、学校、大学、病院、感化院などである。そして、institution は一般に慈善的、教育的行為が行われる建物そのものも指すようになった。つまるところ、建物とそれが持つ精神性が同一化されたものが institution である。それはこの時期の建築のデザインにもみられる。建築物自体が人間の精神を表現するようなデザインが競ってなされたのがこの時期である。例えば牢獄であれば、それが邪悪の巣を表現するがごとく、冥界への入り口のようなファサードを持った建物がデザインされた。[3] また、ベンサムが権力を最も有効に活用し、人間の精神を功利的に改良すべき監視装置である牢獄パノプティコンを考案したのもこの時代である。

このことはブレイクの詩の本質と深く関わる概念である。Institution という建物の中に閉じ込められた、他者を教化しようとする精神性は、正規の学校教育を一切受けず、また幻視の能力を持つがゆえに、精神病院に収容 (institutionalize) されそうになった詩人にとって、軽視できるものではない。[4] この時代、この意味における institution の語が使用された背景には、ある制度や目的性に則って精神があるひとつの型にはめられうるという概念が生まれつつあったことを示す。この意味での institution こそが、ブレイクの生きた時代と人間の精神を結びつけるものなのである。ブレイクは institution のもつ精神性を理解していた。ブレイクは 18 世紀に生きた天才と

して、フーコー的な意味での権力が所有する精神鍛練装置である建物の関係を認識していた。ブレイクが「予言」したことは20世紀の世界に現実になっているように思われる。我々現代人は、学校、会社、宗教、協会等どこかに所属してなくてはいけない不安にかられたりする。これは完全に institutionalize された精神であるといえる。ブレイクが警鐘を鳴らしたのはこのような近代的な自我、自分で自分を何かの枠にはめようとする「心が鍛えた枷」なのだ。

そのことが明確に示されているのは『ロスの歌』である。そこでは、人間精神の隷属化が最も甚だしいまでに行われた土地アフリカが描かれる。その世界は、楽園に立つアダム、アララテ山に立つノアがユリゼンの法律が想像力を司るロスの子供達によって伝えられることを目撃することで始まる。換言すれば、永遠の生を与えられたアダム、霊感を受けたノアの存在する想像力の世界が、ユリゼンの法律によって束縛された世界にとってかわられるのである。そこではロスの子供たちがユリゼンの法律の伝達者となる。つまり、リントラは「抽象哲学」を「東のブラーマ」(ウパニシャッド哲学で世界の根本原理を表す)に与え、パラマブロンは「抽象的な法律」をトリスメギスタス、ピタゴラス、ソクラテス、プラトンに与える。アンタモンはマホメットに「緩く綴じられた聖書」であるコーランを与え、ソーサはオーディンに「戦争の法典」を与えた。そしてこれらの法典は以下の結果をひき起こしたと記述されている。

> These were the Churches, Hospitals, Castles, Palaces:
> Like nets & gins & traps to catch the joys of Eternity,
> And all the rest a desert;
> Till like a dream Eternity was obliterated & erased.
>
> (*The Song of Los*, pl. 4:32-4)

ここでは、上に示したような「法」が、教会、感化院、城、宮殿等の近代の

建物と同等であることが暗示されている。それはまた『天国と地獄の結婚』の中の「牢獄は法律の石で建てられ、売春宿は宗教の煉瓦で建てられている」にも明確に記されている。引用の中の「永遠の喜び」とは、アダムが堕落以前に、食べるものに事欠かない楽園で享受した恩恵である。法律に束縛された世界ではこのような恩恵は消滅し、街の教会、感化院、城、宮殿以外のものを「砂漠」化することで、それらの institution なしには人々が食べてゆけない、言い換えれば、近代的な人間はこれらの施設に精神的に依存せずには生きてゆけないことを示す。ここには人々の精神がこれらの法律、及び建物に束縛されている状態が表されている。

『ロスの歌』では「法律と宗教」はこれらの施設を造り、遂に「五感の哲学」を完成させるとブレイクによって述べられる。この「五感の哲学」とは五感を鎖す哲学の意味であり、ここに法的秩序が近代的施設と結びつき、人間自体が感覚の窓を閉ざすことにより、自らの身体を近代施設と同一化し、近代的建築物としての自我に閉じこもるサイクルができあがる。

さて、そのような institution の本当の機能は、ブレイクによって皮肉な形で暴露される。『ロスの歌』の第二の部分である「アジア」は悪しき権力の最後の拠り所である。ここでもアフリカでの革命精神を体現するオークの、「思想を創造する炎」に驚いたアジアの王達が、「歪んだ洞窟から走り出る」ことで権力の真の姿を白日の下に曝け出す。王達は「御馳走にあふれた繁栄の日」や「享楽的な歌の夜」を楽しむ時に、人々を「拘束し、脅し、弱らせる」ために「王たるもの荒野から飢餓を呼び出さないだろうか」、また、「僧たるもの沼から疫病を呼び出さないだろうか」と正体を現す。彼ら王族にとっては己の享楽のために人々を不幸にするのは当然のことなのである。[5] これらの王たちは長々と権力側の理屈を述べることにより，institution のあるべき姿を吐露している.

'Shall not the Councellor throw his curb

Of Poverty on the laborious?
To fix the price of labour;
To invent allegoric riches:'

'And the privy admonishers of men
Call for fires in the City,
For heaps of smoking ruins,
In the night of prosperity & wantonness

'To turn man from his path,
To restrain the child from the womb,
To cut off the bread from the city,
That the remnant may learn to obey;

'That the pride of the heart may fail;
That the lust of the eyes may be quenched:
That the delicate ear in its infancy
May be dull'd, and the nostrils closed up;
To teach mortal worms the path
That leads from the gates of the Grave.'

(*The Song of Los*, pl. 6:15-pl. 7:8)

これらのアジアの王達の露呈するものは、「アフリカ」で「抽象的な法律」がつくった教会、感化院、城、宮殿などと呼応している。経済制度は、宗教と結びつき、貧乏人には実現できない富（allegoric riches）を餌にして勤勉さを奨励し、常に働かせるために労働力に低い価値をつけて貧しさに縛り付けておく。また、密告者を使い、秩序からはずれたものの家に放火し罰す

る。そして人を正しい道から逸らせ、産まれる前から子供を拘束し、街から食料を奪い救貧院などを造るのも、そのような施設に頼りたくなければ働くべしといった、民に対するみせしめのためであることが露呈される。ブレイクの詩では圧制者は「アルビオンの天使」と呼ばれ、guardian angel として描かれる。しかし guardian of the poor とは18世紀に救貧区などにおかれた貧民救済法施行委員を意味する。飢餓や疫病を利己的な用途のために、引き起こしているのはそのような権力側の王や僧侶である。「心の誇りを挫くため、目の前の欲望を消すため、子供の繊細な耳を鈍らせ、鼻孔を閉じ、人間の虫けらどもに死すべき道を示すため」とは、感覚の窓の閉鎖を通じて、「永遠の生」を奪うという目的を示す。「〜のため」が目立つこれらの詩行は、社会の不幸が権力側の目的性のために成り立っていることを明らかにしている。これはまさに「ある宗教的、慈善的、教育的等の功利を促進することを目的に始められた組織」である institution の目的性に他ならない。

こういった制度化された社会に揺さぶりをかけるのが、抑圧された革命エネルギーを体現する人物オークである。もともと、『アメリカ』の革命は、「暗きアフリカの神の似姿」であるオークが、「アメリカの平原」をもつ女性と結婚することによって起こった。そのオークは常に火の要素をともなっている。これは権力の象徴である牢獄を襲撃する火であり、浄化の火である。『アメリカ』の最終場面では象徴的に「五つの門が焼き尽くされ、閂と留金は溶ける」。これは明らかに人間の五感の門を象徴している。ブレイクの目的はバスティーユ焼き討ちなどの実際の破壊的な行為ではない。それは詩的想像力を象徴するロスによって歌われることにより、想像力によって裏打ちされた革命精神オークの浄化の炎でもって、近代的自我を閉じこめる institution の扉を解放し精神的な自由を得ることである。

このように政治的な自由と感覚の解放はブレイクの中で結びついている。レイモンド・ウィリアムズが、ロマン主義詩人の社会への関与は個人的な感情と密接につながりがあるというのは正しい。[6] 五感を門にたとえて、その

門からの解放を願うブレイクの個人的な感情は、当時の社会と関与している、というかブレイク自身の中で重要なかかわりがある。ブレイクは子供の時にイエス・キリストや天使の群れる幻を見てそれを父親に話したが、父親はそのような息子を激しく咎めたと言われている。[7] ブレイクは父に「天使をみる」という知覚を禁止された。知覚を禁止する、即ち通常の人々に見えるものしか、見てはいけないとする命令によって、破壊されるのは子供の想像力の世界である。想像力とはブレイクにとって神にもひとしい重要な能力である。

> The Eternal Body of Man is The Imagination, that is, God himself. ..... It manifests itself in his Works of Art (In Eternity All is vision). ('The Laocoön')

知覚の自由の回復はブレイクにとって社会と自己の関心を繋ぐ結節点であった。芸術家としてのブレイクの知覚の自由は想像力の問題と深くつながっている。想像力の世界は知覚を解放することによってのみ存在する。知覚を解放することにより詩人は普通の人と違った風景が見えてくる。例えば、ブレイクの詩「ロンドン」では、「全ての人の叫び、全ての幼子の恐怖の叫び、全ての声、全ての禁止令に心が鍛えた枷の音」を詩人は聞く。これは知覚の窓を開放しない人には聞こえてこない。そして「煙突掃除の子供の叫びが、全ての黒ずんだ教会をぎょっとさせ、不幸な兵士のため息が宮殿の壁を血となり流れる」ことは知覚の窓を開け放った詩人にしか見えない、ヴィジョンとしての街の風景なのである。ブレイクの場合五感の解放はありとあらゆる束縛からの解放への扉なのである。それは教義にかたよった教会であったり、人の精神を矯正することを目論む施設、制度であったり、従うことを強制する学校であった。ブレイクの詩で批判されているのはこのような institution であり、その真の姿は知覚の解放なしには見られないヴィジョンなのである。

ブレイクの詩の中で institution は、また別の意味によっても示唆されている。この言葉の元々の意味は「物事に秩序をあたえること」である。世界に秩序を与えた神としてのユリゼンはブレイクの神話世界では常に批判の対象であり、ユリゼンにゆさぶりをかけ、再生するのがブレイク詩のテーマでもある。そのような仕事をするのが想像力を司る詩神ロスであることは、想像力が五感の窓と結びついていることをみても明らかである。よって『ロスの歌』の最後では、抑圧された革命精神オークがヨーロッパの暗闇より、炎の柱となって現れることをロスが歌うことで、死者が再生され、墓が子宮として新しい生命を生み出す予兆で終わっている。元々 institution とは何かを創始する、システムをつくる意味であったが、ブレイク自らが新しい世界を創設する必要にかられていたのだ。「新しいシステムをつくらねばならない。そうでなければ他人のシステムの奴隷になってしまうから」とブレイクは述べている。

ブレイクが生まれ育ったロンドンは18世紀にはすでに大都会となっていた。自由を求める詩人ブレイクにとって建物に圧倒された非人間的な都会を窮屈に感じなかったことはないであろう。[8] 同じロマン主義詩人でも、ワーズワースはそのような都会を嫌い、湖水地方の田舎に自分の場所を求めた。彼にとってロンドンは驚愕と感嘆の対象であるにしても、個人の人間よりも建物が目立つ非人間的な場所であった。[9] ワーズワースは自我が常に外へ志向する野外の詩人である。一人部屋の中に佇んでいても詩人の精神はある時に見た岸辺の黄水仙とともに揺れている。[10] しかし、ブレイクはワーズワースのように自然の中で生まれ育った経験がないので、最初から建物はそこにあり、自分は常にその中に暮らしてきた。だからどうしても、牧歌的な緑の原野に自己を見出すのでなく、「イングランドの緑の地に新しいジェルサレムを建設する」ことを目的としてしまう。ワーズワースは自然の中にこそ自己を見出す詩人であるので、最初から自己と外をつなぐ窓など必要ない。しかし都会人ブレイクの場合、街、制度によって人間精神が規定されている感

覚があり、institution の存在は脅威として立ち現れてくる。だからどうしてもそこから自由になるための建築的部分である、窓や門が必要なのである。そのような精神を閉じこめる近代的な institution からの解放は、五感の窓を解き放つことなしにはありえないのである。ブレイクの「予言」は現代社会においても重要な意味を持つ。例えば子供の教育にたずさわる institution などは制度や規則によって子供の精神の改良・改善を目指すのではなく、もっと原始的なものに立ち返って、感覚の扉を自由に解き放つような教育を理想とすべきではないのだろうか。

注

ブレイクの引用は全て、D. アードマン編 *The Complete Poetry and Prose of William Blake* (New York: Anchor Books, 1988) に拠り、作品名、引用箇所のプレート番号と行数を本文中の括弧の中に記した.

1) ノースロップ・フライはブレイクが直接的な社会批判を隠蔽するために神秘的な作品を作ったのではなく、意見を伝達したいという強い望みを抱いていたと述べているがそれはある程度までは正しいように思われる。Northrop Frye, *Feaful Symmetry: A Study of William Blake* (Princeton: Princeton University Press, 1974) p. 4
2) ODE の初例は 1551 年トマス・モアの『ユートピア』の英訳版である。
3) 例えば建築家ジョルジュ・ダンスのニューゲート監獄、C. N. レドゥーのエクサン・プロヴァンスの牢獄のデザインなど。
4) この語 'institutionalize' の使用は 20 世紀になってからである。
5) このことは『経験の歌』の詩「人間抽象」にも歌われている。そこでは他人の不幸から自分の幸福をつくる人間精神が根をはって木になり、その木は人間の脳髄に生えていると書かれている。また、「煙突掃除の少年」では「神と僧と王の天国は僕たちの不幸でできている」と歌われる。
6) Raymond Williams, *Culture and Society* (London: The Hogarth Press, 1990) p. 30.

7) James King, *William Blake: His Life* (London: Weidenfeld and Nicolson, 1991) p. 6.
8) ブレイクが唯一経験した田舎生活の地フェルパムでは、ブレイクは 1800 年 9 月 21 日友人ジョン・フラックスマン宛に書いた手紙のなかで「天はここではあらゆる方向にその金色の扉を開いている」と述べている。
9) William Wordsworth, 'Composed upon Westminster Bridge.'
10) William Wordsworth, 'I wandered lonely as a Cloud'.